

---

# 煌夜とキセキ

青空 白雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

煌夜とキセキ

### 【Nコード】

N0524N

### 【作者名】

青空 白雲

### 【あらすじ】

魔術が世界に蔓延したのは、一五年前。  
突然変異によって生まれる『魔法使い』が世間にはれてしまい、それに伴って魔術師と名乗る人々が現れた。

実験的に設立された魔術学校、魔術開発施設。

魔道具、魔術による兵器の開発。

さまざまなことが行われ、今日。

理論をぶち壊す魔法を使える者 魔法使い赤月煌夜（あかつきこうや）は『魔術科高等部』のダメ学生として生活していた。

そんな平穏な生活を送っていた煌夜だったが、ある重大な事件に巻き込まれ、波乱の日々を送る事になるのだった。

## プロローグ

奇跡の扉を開ける言葉は一誰の脳にも（．．．．）刻み込まれている。

人為的にそれを気づかせることで誰もが魔術を行使できるようになるのだ。

ただ、真の意味に気づく者は少ない。

魔法遣い　ダイアン・フォーチュン

魔法使いは争いを呼ぶ。

例えば、蒸し暑いからと夜に散歩がてら公園に行くと空き缶が落ちていて、親切心でしゃがんで拾ったら目の前にミニスカートの女子高生が居て、弁解する時間もなく顔面を蹴飛ばされ、しかも、その女子高生は魔術を持て余した不良の彼女であつたり、する。

「魔法使いなんて、魔法使いなんて、大っ嫌いだああああ！」

狭い夜空に魂の叫びが響き渡る。

あかつきじつや赤月煌夜は『身体からだの奥底にある温かいモノ』　魔力　を引つ

張り上げ、身体の内側と外側に纏わせるようにイメージする。

それだけで肉体強化は強化され、時速八〇キロというスピードで裏路地を駆け抜ける。

ビルに挟まれ存在している裏路地には月の光すら入ってこない。闇夜に目を凝らしながら、走り、室外機に足がぶつかった。

「うおおッ!？」

八十キロという、ふざけたスピードで走っていたため空中に放り出され、狭い夜空と薄汚い地面が交互に目に飛び込んでくる。

ズダンと、ガムがへばり付いている地面に危うい体勢ながらも着地した。

景色が回って見える。

後ろには移動術式で移動してくる不良。

一歩で五メートルという距離を走ってくる。

おそらく、一歩一歩の移動距離を爆発的に伸ばしているのだろう。簡単な魔術だ。

不良は煌夜の絶叫に疑問を抱いたような顔をしたのだが、深くは考えない性格らしく今は獲物を捕えたと言わんばかりの顔をしている。

魔術が世界に蔓延したのは、一五年前。

突然変異によって生まれる『魔法使い』が世間にはれてしまい、それに伴って魔術師と名乗る人々が現れた。

それからは魔術の世界である。

実験的に開校された魔術学校、魔術開発施設、魔道具、魔術による兵器の開発。

それだけ変化が起こったのだ。

不良も変わった。

暴力よりも、魔術に変わったのである。

（くそくそくそ！ 暴力のリンチなら楽勝で耐えれたのにつつか、

一瞬で逃げたのにー！)

結局、逃げるという選択肢しか選ばない煌夜だった。  
ヤジロベエのように頑張ってバランスを取りながら走る。

「待ちやがれ teme 俺の女に手え出しやがって！」

「なっ！？ 事故だらありやどう見ても！」

そんなことを言いながら走り続ける。  
と。

不良の移動速度が急激に遅くなった。

どうやら、不良の魔力の量は少なかったらしい。

それとも、術式に不具合でも起きたのか……まあとにかく何とか  
なった。

安堵と同時に、ポケットに唯一入れてきた二百円存在を思い出した。

ジュースでも買おうかなーうははははは、とそんなところで  
テンションが高くなった煌夜は真横にある路地に入る。

月明かりが射し込む路地だった。

へー今夜の月は満月か、と月を見ながら歩く。

むに、と柔らかい感触が靴から足に伝わってきた。

ぞわり、と鳥肌の立つ感触だった。

譬えるなら、人を踏んでいるような感触。  
空気を切り裂いて慌てて飛び退る。

え？ 一瞬思考が停止する。

(な、何なんだあ！？ このわけ分からんオンナノコはあ！？)

うつ伏せに倒れているので断定はできないが丸みを帯びた華奢な体格を見る限りは女の子だろう。

その銀髪は腰まで伸ばしている。

踏んだのはどうやら背中らしい。

淡い青色の服の一部が黒ずんでいた。

「……えーと、声をかけたほうがいいのかな？」

「」

少女は何か言った。

生きてはいるらしい。

ほっと、半分以上本気で安堵の息を吐いて銀髪の女の子に近づく。

「おい、大丈夫か？」

その言葉は喉から出なかった。

何故なら戸が開くように跳ねて起き上ったからだ。

魔術。

（呪文を詠唱して……？）

疑問に思いながら、少女の姿を見る。

大きくつぶらな翡翠色の瞳。小さな桜色の唇。

笑ったら最高に可愛いのだろうと簡単に予測はつく。

しかしその顔に生气はなく、能面のような不自然な無表情だった。

だが、熱でもあるのか頬を赤く染め、泥のような汗が鼻梁を伝う。

何かに必死に抵抗するかのように首をギチギチ、と振る。

そんな、しんどそうな少女を見て無性に心配になった。

「な……あー大丈夫、か？」

かける言葉が見つからずにそう言って近づく。

直後、少女の身体が膨らんだように見えた。

それは少女の身体から発せられた津波のような魔力の奔流だ。

ぶあっ！ 少女の蒼い魔力が煌夜の細胞の一つ一つを無理やりこじ開けて、流れ込む。

「があッ……！？」

針を刺すような激痛に視界が歪む。

魔法を発動しようとした瞬間。

少女の唇が、小さく動く。

「赤月煌夜。十六歳。魔力総りよ……う……」

壊れたラジオのようになり、少女は倒れた。



## 1章第1話

激痛から解放された煌夜は怒るのも忘れて、慌てて少女に駆け寄る。

「お、オイ。大丈夫か？」

少女の顔は先程のあらゆる感情が欠落したモノではなく、今にも死にそうに浅い呼吸を繰り返していた。

「えーあー、どっ、どうしよう!？」

とりあえず少女を揺さぶる。  
症状が悪化するとかは一切考えている余裕はなかった。

「オイ、ホント大丈夫かお前」

よく見ると少女の着ている服は医者や、手術を受ける患者が着るような淡い青の白衣だった。

「……お前、病院から逃げてきたのか？」

気絶しているのか、あまりにもしんどいのか応答はない。  
額に手を当てる。思わず手を離してしまう程の高熱が宿っていた。  
病院に連絡しようと考えたが、そもそも暑苦しくて外に散歩して  
ただけでケータイを持ってきたくない。

（ああクソ！ 携帯のくせに必要な時に無いなんてどういうことだ  
こらー！）

そんなことを思いながら少女の苦しそうに上気している顔を見る。放って公衆電話探しの旅に出かけるのはどうかと思うし、それに公衆電話が見つからないという可能性もある。

病院に連絡でき、そして少女をほったらかしにもしないという条件を満たさない解決方法を削除していく。

「連れて帰るしかねえよな……」

たった一つ残った解決方法を口に出して、苦しそうにうなされている少女を見る。

その次に、そういえば彼女が無表情で攻撃してきたのはどういう理由からだろうと考えて止めた。

どうせ病院に連絡して連れ帰ってもらう間の関係に過ぎないし、少女が目覚めますまでは本当の理由などわかる筈もないという理由からである。

蓋を少しずらして弱火で煮る。

鮭入りの特製お粥を作っているのだ。

別に煌夜が食べる訳ではない。

食べる（予定）なのはようやく息が安定してきた少女である。

なぜまだ少女が居るのかというと、病院に連れて帰らせる、という目的の達成を成し遂げるには少女から病院の名前を聞き出す必要があるからだ。

ちなみにおかゆを作っているのは親切心からである。

時刻は既に午前二時。

台所から顔を出して、今時珍しい畳の居間に敷いている布団を見る。

そこには不快そうに顔を顰める少女が眠っていた。汗の所為でべつとりと肌に張り付いている白衣が気になるのだろうか。

少女の銀髪は光の加減でピンク色に変わるらしく、今の少女の髪はピンクだ。

（けど、もつとしつくりくる色があつたはずなんだけどなあ）

思いながら少女から目を離す。まだ起きそうにない。

少女の親は心配しているのだろうか、しかし、こんなにしんどそうにしている少女を叩き起こして、電話番号を訊き出すのは気が引ける。

煌夜はお粥を作ったあと、台所で眠った。

痛みで目が覚めた。

硬い床で寝たからか、身体の節々が痛い。

時刻は午前七時二〇分。

部屋を出る時間はギリギリまで伸ばすと八時一〇分。

そんな計算をしながら腰の辺りを揉んでいた煌夜を少女は見つめていた。

煌夜はそれを気配で気づくと怯えさせないように笑顔を向け、少女との言語の壁を越えたコミュニケーション 即ちパントマイムをする。

まず、少女のことを指さし手を倒す。

そして、自分のことを指さしさっき倒した手を持って。

「あー。わたしは日本語話せるよ?」

真に申し訳なさそうに少女はそう言う。

猛烈に恥ずかしいという気持ち がせり上がってくるが、ポーカ―  
フェイスを決め込み、問う。

「んで、お前はなんで俺のこと襲ってきたわけ？」

「ん？ 襲ってきた？ って何のこと？」

不思議そうに首を捻り言う少女に怒鳴る。

「はあ？ お前裏路地で襲ってきたじゃねえか！ 能面みてえな顔  
してッ！」

少女は理解不能といった顔をして煌夜を見ている。

ふとした疑問。

あれだけ熱を出してあれだけ苦しそうにして、あの無表情はなん  
だっただ？

まだあの少女と今、目の前に居る少女が別だと言われた方がしっ  
くりくる。

「ホントに、覚えてえねえのか？」

「うん。ごめんね」

「まあいいけどさ…… あーそれより、お粥食う？」

またまた、小首を傾げる少女。

確かに外人さんには馴染みがない食べ物だろう。

台所に行き、お粥を温めなおし出してやる。

好奇心旺盛な瞳をキラキラさせてお粥を見る少女。

「おー！ これが噂に聞く食べ物！？」

少女はスプーンをグーで握ってお粥をかき込む。

「食べ物を噂に聞くて何？」

訊いた直後。

ぶー！

お粥が熱かったのか、吐き出した。

煌夜の顔面に。

「あッッッ……じいじいッ！！？？」

煌夜は座ったまま跳ね上がり、背中から落下してうずくまる。

少女は慌てたようにあわあわ言いながら手を上下に振っていた。

## 1章第2話

トイレで顔面についたお粥を拭きとり、ついでに制服に着替える。居間に戻ると少女がお粥を超幸せそうに食べていた。気にいったのだろうか？

少しの間何気なく見ていると少女の顔に苦しそうな汗が浮かんできた。

「おなかが張り裂け、そ……」

ばたん、と少女は畳に転がり、お腹を押さえる。そんなに入れた覚えはないんだけどな。近づいてお粥を見ると三分に一しか減っていなかった。

（食欲ねえんだろうな）

そう思いながら転がって、満腹感を味わっている少女に質問する。

「なあ、お前どこの病院から逃げてきたんだ？」

「病院なんて行ったことないよ？」

「行ったことないよって……どんな凄い嘘だ」

「うそじゃない！」

「今のはツツコミどころですか？　なんか戻りたくない訳でもあるわけ？」

「うつ、うつうつうつ？……」

少女は卓袱台に爪を立てて唸る。

恐るべき力でも込められているのか爪が卓袱台に食いこんでいた。

「うわ！？ 獣声になってる！？ ていうかわかったから止めてそれー！」

とりあえず謝ってからケータイで時刻を確認する。

丁度八時。

さて、コイツの処遇を決めないといけない。

もう苦しそうな感じではないとはいえ目の前でぶっ倒れた場面を見てしまったのだ。

追い出すのは流石にダメだろう。人として。

「家は近いのか？」

「家っていうか……まあ住む所はもうないけど」

言い放つ少女に面喰って、どんな反応を返せばいいかわからなかった。

嘘なら豪快過ぎるし、本当なら凄じい訳あり少女だ。

何というか、どっちにしても係わり合いになりたくない。

「ええっと……帰る所がないと言いたい訳？」

「うん」

ずず、と少女は頬を緩ませながら麦茶を飲む。はあ、やっぱり帰る所がないっていう答えかと、一生解けない数式に挑まされているような感覚に陥る。大きく嘆息する。

「どうでも良いけどモノ凄いくつろぎっぷりですね」

ぷはーとか言いながら扇風機の風に当たっている幸福そうな少女を見て言う。

他人の家を占領する才能でも持ち合わせているのかコイツは。

「うん。この家気に入ったよわたし」

につこりと何の邪気もなく微笑みながら少女は言う。

煌夜も釣られて笑った。

時刻は既に八時五分。

そろそろ学校に行かないとヤバい時間帯だ。

「親は？ 親ならいんだろ？」

「居ないけど」

「あ、あのなあ。一応親に連絡しないと、心配するし」

家出少女かも、と煌夜は少し呆れる。

親が鬱陶しく感じる時期なのかも知れない。

煌夜の言葉に少女はむっ、としたように、

「あなたはわたしの言うことをひとつも信じないの？」

「いや、まあ残念ながら常識的な頭があるものですから、つつかどこに信じる要素があるんだよ！」

「むっ……ふん！」

不機嫌なご様子のお嬢様は、煌夜を視線を逸らし、一転、ご機嫌な様子で部屋の中を好奇心一杯の瞳を大きくして見回し始めた。

（感情豊かな奴だな、オイ）

非生産的な質問にうんざりしながらも少女に問う。

「なんで倒れてたわけ？」



少女はモノ珍しそうに辺りを見回すのを止めて煌夜に言う。

「多分、いつもの持病だと思う」

「あ、あれ持病なんだ。つか、なら病院行ってんだろテメエ」

少女は卓袱台の下にあったアクションものの漫画を手にとり、瞳をキラキラさせて何気なく言う。

「んー？ 病院じゃなくて、研究施設で治してたらしいから。にしても狭い部屋だね」

「研究施設？」

煌夜の訝しがる声で少女は自分が変なことを言っただけということに自覚したのか、小首を捻って言う。

「どうしたの？」

「どうしたのってお前、何者だよ」

「あ、そういうば自己紹介してなかったけ？」

「そういう意味じゃねえ！」

「わたしの名前はフィナって言うの。よろしく。あなたの名前は？」

銀髪、翡翠色の綺麗な瞳を持つこの少女はフィナというらしい。

煌夜は自己紹介するのを少し躊躇った。

自己紹介したが最後、フィナを見捨てられないような気がしたのだ。目の前の少女　フィナを見る。

フィナはわくわくと笑顔で煌夜のことを見ている。

自己紹介如きでなぜそんな顔ができるのか、煌夜にはわからなかったが、そんな顔をするフィナを前に名乗らないという選択肢は魔法のように消えていた。

「あー俺の名前は赤月煌夜」

ケータイを開けたところ、時刻は既に八時八分。  
研究所についてもっと突っ込んで聞きたかったが、とりあえず問題を棚上げすることにした。

「あ、俺学校行ってくるから。昼飯はお粥食つといて」

こんな時に学校か、と思うかもしれないが単位が取れないかもしれない魔術学で休むのはマズイのだ。

少女が寂しそうな顔していたのがやけに気になった。

「今日の魔術学よ。戦闘だよな」

そう言ったのは煌夜と並ぶ劣等生 くろかみつくろ 黒神創だ。  
えらく冒険的な感じのする名前だが本名である。

整った顔立ちで、煌夜と同じ漆黒の髪を眉辺りまで伸ばしている男だ。

「え？ マジ？」

「おう。ガンバレ。不良に追いかけられるのが日課だろ？ 楽勝じゃん」

「楽勝な訳あるかあ！ この俺のオンオフなしの能力のせいで絶対強い奴と当たるに決まってるだろうが！ この前も学年で一番強い奴と当たったし！」

「ああ。そういや、お前山辺と当たりまくってるよなあ。あれか？

運命の赤い糸かなんか？」

「バトルで繋がる赤い糸なんて聞いたことねえよ。つかてめえだつて当たる可能性があんのに余裕だな？」

「べ、別に余裕って訳じゃねえよ？」

魔術戦。

昨日の不良のように魔術の力をぶつけたくうずうずしている奴と  
いうのが少なからずいる。

そこで、魔術を使って闘うというバカげた授業が作られたのだ。  
別に絶対に出ないといけない訳ではない。

けれど、煌夜は出る。

勿論、戦闘狂という訳ではない。

単位が少ない人の救済措置でもあるからだ。

「はあ、サッサと終わらせよう」

「終わらせられるの間違いだろ？」

「うるせえ」

「やまべれん 山辺恋対 あかつきこうや 赤月煌夜」

コンピュータによって決められるらしい対戦発表にやっぱりか、  
と溜息を吐く。

山辺は、爽やかな笑みを浮かべて言う。

「今日もよろしくね。赤月君」

肩まで伸ばしている黒髪から申し訳程度に甘い匂いが漂ってくる。そういえばアイツもいい香りがしたな、と思ってからアイツしっかり留守番してんだろな。

研究施設って何の話だったんだろう？ まだアイツ居るかな？

と思考の海に沈んでいく。

と、不意にぐいー、と頬を引つ張られた。

「よ・ろ・し・く・ね？」

目の前には、氷細工のように整った顔をしている少女が目を吊り上げて怒っている。

なんで怒ってんの？ と疑問に思いながら視線に含まれる重圧に耐えきれず、目線を逸らす。

「よ・ろ・し・く・ね！？」

煌夜はコクンと頷いた。

「くそう！ 魔術文使うなんてうわわわあッ！？」

まじゅつぶん  
魔術文。

魔術にはさまざまな発動方法がある。

一番簡単なのが術式。

そして最も難しい方法ではなく、二番目に難しいのが術式や魔法陣を記号化し、簡略化する魔術文を使った方法である。

魔術文を使うには無意識を意識しなくてはならない。  
ただし、普通の無意識（無意識的な行動など）を意識しても意味はない。

脳の魔術を生成する場所　そこに意識して踏み込むのだ。  
そこで、記号と魔力を練り合わせ、魔術を生成する。  
超難易度が高い方法だ。

砂のつぶてを無様に転がって避ける。

石で造られている部屋は転がるとやはり痛い。

煌夜は身体、心の奥底にある『何か温かいモノ』　即ち魔力を  
引つ張り上げて身体の内側と外側に纏わせるイメージ。

魔法で身体能力を上げ、恋の魔術を避ける。

勝負の付け方はこうだ。

弱い魔術を撃ってきたらすかさず飛び込み、倒れた振りをするか、  
制限時間である一〇分間、魔術を避けまくるかである。

殴って倒したり、魔力を放って倒したりするのは後味が悪すぎる。  
まあ、こういう性格だからこそ『逃げるときにしか力を発揮でき  
ない可哀想な子』として認知されている訳だが。

「やるわね！」

「いや、ただ逃げてるだけだけど!？」

煌夜の悲鳴に応答するように、

ゴッ！　空気砲を何十倍にも高めたような音がした。

恋の目の前で塵が中空を舞う。

空気を圧縮して飛ばす魔術。

それは、人を確実に気絶へと追い込む。

それが、五つ。

煌夜を全方位から襲う。

「まだよ！」

恋の言葉と同時に石の床が蛇みたいになって、煌夜の足に絡んだ。

簡単な命令をプログラムした魔力をモノに浸透させて動きを同調させる高等魔術だ。

（や、ばっっ！？ 並列魔術！？）

身体に纏わせている魔力を増加。

攻撃に耐えうる身体を手に入れた煌夜は台風のような風に飲み込まれた。

「っ！？」

直撃した筈なのに、キョトンとした顔で煌夜は立っていた。

石は瓦礫と化し、煌夜の足元で横たわり、風は当然もう存在していない。

「なっ！？ なんで！？ なんで効いてないの！？」

うるたえる恋に何と答えるか迷った拳句、本当のことを言うことにした。

「んーなんかよくわかんない」

「終了です」

アナウンスが終了を告げた。

### 1章第3話

首を捻りながら部屋を出ると茶髪に野性的な顔をしている男子生徒が立っていた。煌夜の友達である、相田あいたそら空だ。

「どうしんたんよ。煌夜」

「んー。いや山辺の攻撃が当たったと思ったのに当たってなくて、あーよくわからん！ まあ、いいや」

「ふーん。なら食堂行こうぜ。オラ腹減ってて仕方ないんよ」  
「今更だけどお前の第一人称ってすげえ変な」

言いながら二人は食堂へと急いだ。

むわ、とした熱気が煌夜の身体を包み込んだ。

この部屋にはクーラーというモノはなく、扇風機しかないので熱帯夜は眠れないのだ。

「きゃあ!？」

玄関からも丸見えな居間から聞こえたのは悲鳴だった。  
フィナは空中を舞い、顔面からこけた。

手が意思とは無関係にテレビのリモコンを叩く。

ぶあつ！ と白衣が捲れ、下着と白い太もが見えた。

「ぶつ！」

視線を一気に逸らした。足首の方を見ると、ケーブルがあつた。どうやら引っかけたらしい。

『あなたが犯人ですね奥さん』

テレビが点いて刑事が崖の上でそんなことを言った。  
フィナは何かにせつつかれたように跳ね上がり、テレビを見ること三秒。

「ふふ。わたしは知っている。電気屋さんの所にあつたあれだということ！ ふふん。もう驚かないよーだ」

テレビを一方的に悪者（？）扱いしてから、テレビを食い入るように見だした。

テレビを知らなかったって、どんな山奥から来たんだ？ と、煌夜は思うが、そこはあえて触れないことにする。

物凄く面倒くさい展開になりそうだったからだ。

それに今聞くべきことは家の話である。

煌夜が靴を脱いで部屋に入った直後。

フィナはコチラを勢いよく振り向いてから、走って出迎えてきた。  
フィナの瞳は何故か赤くなっていた。まるで今まで泣いていたように。

「おかえり。煌夜」

恋人にでも向けるような極上の笑顔を向けてきた。  
泣いていたとか深読みのし過ぎですと言外に言われているような気がする笑顔だ。



なんで帰ってきただけでこんな笑顔を　出会って間もない他人  
に向けるのか煌夜にはわからない。

わからないけどまあ、それでもいいかなと思う。  
そして少女は笑顔は、心なしか気まずさを伴い　。

「ごめんね。あれ壊しちゃった」

あれ？　と煌夜は少女の指さした方向へ素直に目を向ける。  
台所の正面。

ぷすぷすと煙を噴き上げる電子レンジが……？

更に何の嫌がらせなのか、電子レンジには逆さに鍋が載っており、  
お粥がそこかしこに飛び散っていた。  
爆心地みたいな荒れようだった。

「いやーいきなり火花が散って、お皿も熱くなってる……」

フィナの言葉など煌夜は聞いていない。

ふるふると、怒りとやるせなさで泣きそうになる。

「てめえ！　今から三〇秒以内にこうなった理由を言いやがれ！  
いいや今すぐこれを何とかしろおお！」

怒鳴りながら、しかし台所からフキンを持つてくるのは煌夜の優  
しさか。

とはいえ、フィナの好感度が下がったのは確固たる事実である。  
もう顔も見たくねえやい、と顔を背けて、逆さになっている鍋を  
恐る恐る取ってみる。少女のために作ったお粥がどろっと、床に落  
ちた。今更少しばかり落ちたところでダメージにもならない。

レンジが陥没していた。おそらく、というか絶対にこれが壊れた  
原因だ。

フィナは手伝った方がいいかな、けどこんなに怒ってるんだから近づかない方がいいのかな、とおろおろしながら煌夜を見、今さっき言われたことをまずしようと思った。

「あなたに言われた通りレンジで温めたらお皿が熱くなってっ…」

しゅん、と萎れながら状況を説明する。

火を使わずのはちよつと心配だったのでレンジで温めて食っとけよ、とそう言った。

けど、常識的に考えてこんなことにはなり得ない。

ここだけ、地震が起きましたみたいなことになる筈がない。

鍋を水に浸けながらしくしく心の中で泣く。

そして、

鍋？　そして、レンジの中に入っているスプーンを見る。

お皿など存在はしない。

「お前……」

煌夜の呆れ返った声にフィナは親に叱られた子供のように肩を震わせた。

「鍋＋スプーンのコンボ技を決めやがったな？　んで、鍋が予想以上に熱かったもんだからレンジに投げ捨てやがったんだな？　スプーンをレンジに入れたら火花散るってことくらい分かんたる？　常識だぞ常識」

怒るというより呆れている煌夜の言葉が癪に障ったのかフィナはむっとした表情で言う。

「外の常識なんて知らないもん。勝手に何でも分かるとか思われても迷惑なんだけど」

「外って何？」

煌夜の疑問にフィナは一秒もかけずに答える。

「研究所の外のことだけど」

また研究所か、と嘆息する。

「研究所で何かやってたのか？」

「薬を飲んだり、変な機械に入れられたり、魔術をかけられたりしたぐらいかな？」

「？ ようするに実験台にされてたってことか？」

「実験台というより、核を担ってるって科学者の人が言ってたよ」

「核……？」

そこで、煌夜は思い出した。

あの、無表情のまま攻撃してきたフィナの姿を。

煌夜が結論を纏める前に唐突にフィナが言う。

「それで、わたし追われてるから行くね。もうすぐあの人達来そうだし」

「は？」

フィナの寂しげな笑みを見て煌夜は心臓が串刺しになるような気分になる。

この少女は煌夜を傷つけまいとしているのだ。

煌夜は無意識の内に手を掴んでいた。

「あー馬鹿。誰かが追って来るんだったらここに隠れてろよ。見つかっても話せば分かってくれるかしんねえし」

フィナは小さな唇をモゴモゴと動かして、煌夜が遮るように言う。  
フィナが言う言葉くらい予測済みだったからだ。

「別に迷惑な

」

んかじゃねえよとは言えなかった。

ガチャリ。

不気味な程大きくドアを回す音が聞こえたからだ。

## 1章第4話

煌夜はフィナを庇おうと前に出る。

ドアから出てきたのは、ジーパン、Ｔシャツという普通の格好をした二十代位の男だった。

眼つきが鋭く、背が二メートル近くある金髪の外国人だ。

濁った緑の瞳が不気味に輝く。

「俺の名前はウォルロ・アクロイド。フィナを渡してもらおうか？」

不気味な笑みを浮かべて言った。

ぞわり、と恐怖が金属の触手のように煌夜の背中を伝って来る。

これが、本物の威嚇。敵意。

不良の威嚇や敵意など赤ん坊に凄まれたくらいにしか感じない。量ではなく質が違う。

煌夜は震えそうになる身体を必死に押さえつけて言う。

「帰れよ」

ウォルロは一瞬、負の感情と正の感情を全て秘めて、混濁したような表情をした。

対して煌夜は身体から威嚇として魔力を漏らしてみろが、ウォルトはそんなこと意にも介さずに不気味な笑みを湛えて問う。

「渡す気はねえんだな？」

「当たり前だろうが」

そうか、と呟くと、ウォルロは綱引きでもするかのように両腕で空気を引っ張った。

グン、と煌夜の身体が砲弾のように投げだされる。

「なっ!?!」

投げだされたまま部屋を飛び出し、そのままマンションから飛び出した。

手すりを掴もうとするも、腕の長さが圧倒的に足りない。

飛んだまま二階から投げだされ、自転車置き場に突っ込んだ。とはいえ、魔力で身体を強化していたのでダメージはない。

「くそっ!」

自転車を乱暴に蹴散らして、二階まで跳ぶ。

フィナはウォル口に色んなモノを投げつけて応戦していた。

しかし、ウォル口にぶつかる前に全て地面に落ちていく。

煌夜は廊下を走りながら『温かいモノ』を身体の底から取り出し手に持っていくイメージ。

そして、手に魔力を溜めて、飛ばす。

バレーボール位の大きさの光弾は空気を切り裂いて、ウォル口に飛んでいく。

ウォル口はこちらを向いて、光弾に吹き飛ばされた。

「があっ!?!」

何か信じられないモノでも見るように部屋に倒れる。

それと同時に部屋に踏み込んだ煌夜は怯えているのを悟られないように大声で怒鳴る。

「帰れつつてんだろ! まだやるってんなら本気でデメエを倒す!」

ウォル口がむくりと起き上る。何のダメージもないようだった。

「お前、一体何者だ？ 何で俺の砲撃無効化術式が効かなかった？」  
「はっ！ 俺は魔法使いだからな。テメエなんてザコ同然。分かったらとつとと帰りやがれ」

これは、率直に言うとはッタリだった。  
恋との戦いでも不良との戦いでも逃げたり降参したり、しまくっていた煌夜に戦闘の知識などほとんどない。  
世の中に語られている『魔法使い』の怖さを知っているのならここで一旦退いてくれる筈だ。

「お前がおかしな力を持つてんのは分かった。今まで起こったことを考えれば納得だしな。けど、おかしいじゃねえか？ テメエの今の技、『地』『水』『木』『風』『空』『光』『闇』『雷』『無』『有』『憑依』『重力』『吸収・放出』『運動』の一四種類とは違うじゃねえか」

「……」

世界には一四種類もの魔法使いが一人ずつ居るとされている。

しかし、煌夜はそのどれにも当て嵌まらない。

煌夜は一四種類の中に入れるとしたら『魔力』かなーと常々思っている。

煌夜の魔法使いとしての力は理論上以上に魔力を扱えることだ。勿論、魔力の容量の常人よりも多い。

というか、理論上あり得ない多さだ。

ウォル口はまあいい、と言ってから、

「お前が魔法使いだからって俺が退くと思ったのか？」

「……ッ！？」

空気が緊張で張り詰める。

煌夜は片手を上げてフィナを守る意志を示し、言う。

「大丈夫。絶対お前を守ってみせるから」

声が震えているのが自分でも分かる。

それが分かったのか、フィナが無理やりな笑顔で煌夜に声をかける。

「わたしは、大丈夫だから……」

その笑顔を見た瞬間、心臓が杭で打たれたような衝撃で煌夜の身体が硬直した。

フィナはそんな煌夜に安心させるように微笑みかける。怖い筈なのに。

煌夜がフィナに声をかけたのは言葉にしないとフィナを裏切りそうだったからだ。

なのに、

拳を意識せぬままに握り締める。

何でコイツはこんな笑顔を作れるんだ？

何か、理不尽な怒りが込み上げてくる。

煌夜がその感情を処理し終わるまでに空気の塊が腹に当たった。

「ごふぁあっつ!!?」

ガラス戸から外にふっ飛ばされた。

ガラスが粉々に砕け散る。真下には車道。

轟！ ウォル口の足元に空気が凝縮され、解放された。ガラス戸から飛び出し、煌夜に獣のように襲い掛かる。



ウォル口は煌夜の二メートル程手前に飛び出した。煌夜は大きく腕を振るい、光弾を放つ。腕が重く感じた。ウォル口は蝶のように、優雅に光弾をかわすとポケットから紙を取り出し投げる。煌夜の拳に張り付いた。

「なんっ」

魔力によって強化されている思考を高速で回転させる。

紙には英語でも日本語でもない言語　魔術言語が書かれている。何と書かれているのか煌夜には分からない。

煌夜は唇を噛む。

学校では教わっていない単語だらけだ。

ベリッ！　と。何か効力が発揮される前に紙を拳から引き剥がす。煌夜の身体が突如、斜めに恐るべき速さで跳ねた。

（紙と人を同調させる魔術か……ッッ！）

魔術の正体を予想。車道を突っ切り、鈍い音と共に向かいのマンションの壁に激突した。

「が……ッ!？」

肺から強引に酸素が吐き出される。

ふわりと、煌夜は地面に落ちていき、真下に居たウォル口に顎を蹴り飛ばされた。

「がっああああ!？」

ボーリングの球のようにマンションの屋上まで飛んで行った。背中にバットで殴られたような衝撃が走り、屋上のフェンスに布

団のように引つ掛かった。フェンスが少しひしゃげる。フェンスからずるりと落ちた。

「はっ。テメエの身体あどうなってんだ？ 普通に気絶させる予定だったんだけどな。化けモンか」

いつの間にかウォル口は温暖化防止対策なのか土と植物がある屋上に降り立っていた。

「なあ、オイ。アイツが未完成の兵器だってことは知ってるか？」

いきなり、心底つまらなさそうな声でそう言った。

## 真にもうし訳ありません

改訂版を投稿します。

理由は、今書いている話よりも（自分的には）面白い話が、思い浮かんだからです。

お気に入り登録してくれている皆様、読んでくれている皆様、勝手に申し訳ありません。

以下、文字埋めの改訂版プロローグです。

意見がありましたら、どしどし感想欄に書き込んでください。

以前よりも、いいと思うのです。

しかし、お前の価値観はちょっとおかしいと言われる白鉄ですので勘違いしてはいけません。

世界が死んだ。

夏だというのに極寒のように寒く感じてしまうような光景だった。噴水が噴き出し、電気屋のショーウィンドウに並べられているテレビの音が駅前に空しく響く。

町に住む人々が、動物が、死んだように倒れ、街路樹は、一切の活動を停止している。そしてその全てに一对の羽根が接続されていた。

車やビルに傷一つつけることなく通過し、人に接続されているところを見ると、その羽根には壁というものが無意味らしい。

一人の少年と一人の少女のみしか存在していない世界。

腰まで伸びている不思議な銀髪を持つ少女は少年の予想通り、やはり無表情だった。

大きくつぶらな瞳はガラス玉のようであり、しかし輝きを失って

いる。

少女の背中から大小様々な天使のように幻想的な蒼の羽根が噴水のように無数に、無造作に噴き出ている。

その羽根の共通項は倒れている世界の全ての動植物に接続されているということ。

無論。

少年にもだ。

少年の場合、左腕に接続されている。

いや、接続というより、左腕と一体になっているといった感覚に近い。

少女は世界を壊そうとする墮天使のようだ。

『アクセス完了。魔術起動区間に接続……。接続完了。情報なし』

時間にして、約五ミリ秒。羽根から情報を読み取る声が脳に直接聞こえた。

自分が心の中で喋っているような妙な聞こえ方だ。

『……魔力検索。種別不明。……解析開始』

少年は全身を剣山で突き刺されたような激痛に顔を歪めながら何をするでもなく少女の顔を見続ける。

少女の顔は無表情だ。

ロボットのようない無機質さを秘めている訳でもなく、ただ、無表情。

譬えるとするなら『人間』としての部分を完全に欠落させた『人間』

少年の心臓が痛む。今の激痛なんて目じゃないくらいに。

魔法使い。

そう言われる人が居る。

突発的に現れる巨大な力を持つ人がそれ。だけ。けれど。それでも。

少年の魔法では少女は救えない。

涙が、零れ落ちそうになった。

心が、『諦め』という名の暗雲に覆われそうになる。

『……解析不能。……その間二兆六十七億二千三百万六十七の情報解析を停止。全演算能力を処理系統に移行』

少年に接続されている一对の羽根以外、色素が薄くなる。

そして、少年に接続されていた蒼の羽根の色が濃厚になり、輝きを増した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0524n/>

---

煌夜とキセキ

2010年11月22日11時39分発行